

今日の給食
米粉入りソフト麺
春巻 あさづけ
和風うどんスープ

夢の華 ほぼ日刊 Cキャラクター a t

第704号

神町中学校 夢色通信社
令和2年8月25日

道徳 ～「聲の形」から考える共生～

8月20日（木）、初任者研修の一環として、県教育センターの先生方による、西田芽生先生の授業参観が行われました。当日は道徳（2年3組）で、映画『聲の形』の前半の部分を見て、共生社会について考え、話し合う授業でした。



ある日、将也のクラスに西宮硝子という女の子の転校生がやってくる。硝子はスケッチブックを取り出し、自分は耳が聴こえないため、このノートを通してみんなとコミュニケーションを取りたいと説明するのです。最初はクラスのみんなも友好的に接していたものの、だんだん特別扱いをしなければならない硝子に対し、面倒臭さを感じるようになる。将也は池にノートを捨てるなど、硝子をいじめる中心となっていく。その様子を面白がって見ていた子も、特に止めに入るような子はおらず、いじめはどんどんエスカレートしていく。

西宮さんがいじめられている場面を見て、それぞれの立場から、みんなが仲良く生活していくためには何が必要だったのかななどをグループごとに話し合いました。クラスメイトについては、「言葉のやり取りが問題になり、少しずつ面倒になっている人が増えてきてしまった。障がいについて、きちんと理解してあげることが大切だ。」「耳が聞こえないことを理解し、普通の人として接するべきだった。」などの意見が、西宮さんについては「自分でも限界なんだと正直に話せばよかった。」「一人で抱え込まず、いろいろな人に相談すればよかった。」などの意見が出されていました。（映画では、西宮さんと将也は付き合うことになるのですが・・・）

授業を受けた高橋錦くんは「西宮さんは、普通の生活がしたかったはず。障がいのある人を普通の人じゃないと思うのではなく、普通に接し対話することが大切なんだと思った。」と、八島晴香さんは「西宮さんは、他の人についていくことで精一杯で、空気を読むことまではできなかったのだと思う。そういう人の気持ちを考えて、優しく行動できる人になりたいです。」と、授業の感想を話してくれました。授業の後の感想では、「西田先生も、こんないじめにあったのですか。」「いやな思いをしましたか。」などの質問も、かなり多く出ていたようです。

授業を行った西田芽生先生は「私自身が“障がい”について取り扱うことで、押し付けにならないかと心配したのですが、みんな真剣に考えてくれてうれしかったです。障がい者と健常者の間には、どうしても壁ができてしまいます。障がい者という、特別なくくりをする必要はありません。ハンディはありますが、耳が聞こえない以外は他の人と同じです。障がい者だからと緊張せずに、普通に接してくれることが、私も一番うれしいかも。言葉が通じるのは、当たり前のように日々欠かせないもの。どんな人であっても、最初はコミュニケーションをとってお互いを知ることが大切。知る前から敬遠するのはもったいないと思います。」と話していました。



（本校はローテーション道徳を行っているので、この授業は2年生の全クラスで行いました）